

第2回 YERP研究会（琉球大学，2008.7.4）

企画・司会：岩木 信喜（九州女子大学）・白石 舞衣子（琉球大学）

1. 答えが決まっていない事態における行動選択と前頭葉機能：競合関連陰性電位(CRN)を指標とした社会的認知研究

中尾 敬（名古屋大学・日本学術振興会特別研究員）

我々は、職業選択や対人場面での振る舞いなどといったように、正しい行動が1つに決められていない事態においても行動選択を行っている。このような場面における競合（迷い）はどのようにして解消されているのであろうか。発表者らは、このような競合を解消するための情報、すなわち行動選択の基準となる情報として、内側前頭前皮質において処理されている情報（自己知識・他者知識，自己・他者の心的状態，道徳，報酬・罰）が機能している，とする行動選択基準仮説を提案している。講演では、仮説と共に、その妥当性を検討した3つの実験を紹介する。実験1では、職業選択課題（例：どちらの職に就きますか？・・・教師 銀行員）時に認められる競合関連陰性電位様成分の振幅が、競合の程度を反映しているのかを検討した。実験2, 3では、自己知識の活性化により、職業選択課題時の競合が低減するのかを検討した。

2. 社会的認知と脳：情緒的サポートは心理的痛みと脳の情動反応を低減させる 小野田慶一（広島大学大学院精神神経医科学講座）

社会的サポートは身体的・精神的健康の維持に非常に重要である。しかし、サポートと健康には強い関連があるにもかかわらず、その認知神経科学的な作用機序は検討されていない。そこで我々は仮想的なキャッチボールにおける排斥時に情緒的なメッセージを提示することで、社会的サポートが脳活動に及ぼす効果を検討した。最初は参加者にもボールが回ってくるが、その後排斥されボールは回ってこなかった。さらに排斥セッションの後半では思いやりのあるコメントが提示された。心理的痛みがこの情緒的サポートによって低減した人ほど、前帯状回の活動は低減し、逆に左外側前頭前野は賦活していた。この結果は、前帯状回の活動が情緒的サポートによる効果の神経生理学的指標となること、及び外側前頭前野が調整機能を担っていることを示している。